



茨城県地域臨床 教育センターだより

2023
Vol.46

〒309-1793 茨城県笠間市鯉淵6528 ☎0296-77-1121 令和5年11月1日発行(第46号)

着任ごあいさつ



教授

甲斐 平康

専門領域 ■ 腎臓内科学 透析療法

10月より筑波大学附属病院茨城県地域臨床教育センターおよび茨城県立中央病院に赴任させていただきました。専門分野は腎臓内科学となりますのでよろしくお願い申し上げます。まずは簡単に自己紹介をさせていただきます。私は筑波大学医学専門学群卒業後、筑波大学附属病院、茨城県内の施設を中心に研修を行い、大学院（筑波大学免疫学研究室）を経て、おもに筑波大学附属病院にて腎疾患を中心に診療にあたってまいりました。出身地は東京ですが30年以上茨城県に住んでおり、特定機能病院としての筑波大学附属病院の診療のみならず、茨城県県央地域の医療に貢献できるよう邁進してまいります。

さて、腎臓は＜沈黙の臓器＞とも呼ばれ、かなり病気が進行した段階でないと自覚症状が出現しにくいことが知られております。慢性腎臓病（CKD）の概念が提唱され20年ほどが経過いたしますが、多くの病院やクリニックにおいて血液検査でクレアチンを測定すると推算GFR（eGFR）が併せて表示され、腎臓を専門としない皆様にも患者さんの腎機能に関してご意識いただいていると思います。一方で、CKDを診断するには尿検査も必要になります。また、尿蛋白が多い方ほど腎機能悪化速度が速いことも知られておりますので、尿一般検査や尿蛋白定量／尿クレアチン定量を測定して尿蛋白量を評価するなど、ぜひ尿検査に関してもご留意いただき定期的に実施いただければと思います。

CKDは糖尿病、高血圧などの生活習慣病と密接にかかわり、多くの患者さんはかかりつけ医に通院されております。そこで、筑波大学腎臓内科学の山縣邦弘教授が研究

代表者となり私も関わらせていただいた研究をご紹介します。2008年から3年半にわたって全国49医師会、かかりつけ医通院中の40歳以上75歳未満のCKD患者2,379名について通常診療群と強介入群（3か月ごとの生活・食事指導、受診勧奨、かかりつけ医への診療達成目標の明示など）との間で腎機能悪化などに差がないかを調べました（FROM-J）。その結果、強介入群ではかかりつけ医／腎臓専門医の連携の促進、CKDステージ3a（eGFR45以上60未満）での腎機能悪化抑制が明らかとなりました。さらに最近行った10年後の予後調査においても同様の効果が維持され、心血管病の発症も有意に抑えられることもわかりました。すなわち、CKD診療にはかかりつけ医、腎臓専門医、看護師、管理栄養士、薬剤師、理学療法士、臨床工学技士、保健師など多職種によるチーム医療が大切であり、茨城県立中央病院においても実践しCKD重症化予防に貢献できればと思います。

また、筑波大学附属病院においては常染色体顕性多発性嚢胞腎（ADPKD）の専門外来を引き続き担当しており、茨城県内では最も多くの患者さんの診療にあたらせていただいております。ADPKDは最も頻度の高い遺伝性腎疾患でわが国の指定難病となっており、多くの方が末期腎不全に至る疾患です。近年トルバパタンによる治療が行われており、また高血圧、脳動脈瘤、心臓弁膜症など多彩な合併症を呈します。該当患者さんがいらっしゃいましたらぜひご紹介いただけますと幸いに存じます。

最後に大学教員として着任させていただきましたので、初期研修医・専攻医の皆様や医学生の臨床教育や研究にも力を入れて取り組みたいと思います。茨城県立中央病院では多くの若手医師や医学生が研修されております。次世代を担う医師への教育を通じて、茨城県の地域医療に貢献する医師を育てていく一助となれればと考えております。さらには、自身も自己研鑽をしながら医学の進歩に貢献しうる研究も引き続き進めたいと思います。至らない点多々ございますが、今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

第23回筑波大学附属病院茨城県地域臨床教育センター講演会の報告

教授
柳川 徹

専門領域 ■ 歯科口腔外科

2023年9月21日に茨城県立中央病院Cisco Webex meetingにおきまして、筑波技術大学保健科学部 酒井俊教授による「肺高血圧症の病態解析と治療薬の理解・今後の発展」の講演会を開催いたしました。シリーズでCell Nature Scienceのファーストオーサー経験者の筑波大医学OBの先生をお呼びし、田淵克彦先生、沢村達也先生と講演をお願いしてまいりましたが、今回は酒井俊先生をお招きいたしました。酒井俊先生は1990年筑波大学医学専門学群卒業(11回卒)で、筑波大学大学院から筑波大学循環器内科講師、バイラー医科大学留学などを経て2019年より現職におられます。酒井先生は、ご専門が循環器内科で、とくに心不全と肺高血圧の分野で著明な業績を残しておられます。1996年には心筋のエンドセリン経路の抑制によって心不全の生存率を延ばすという内容でNature誌にファーストオーサーで発表されています。それ以外にも、Circulationを始めとする循環器分野の一流誌に多数の成果を発表されており、日本心臓病学会、国際エンドセリン会議などから多数の賞を受賞されています。筑波大医学OBには大学院時代にNatureのファーストオーサーを出した伝説の柳沢・桜井教授たちがおられますが、酒井先生は、それに続いてNatureのファーストオーサーを出した筑波大伝説の継承者とも言えます。循環器内科研究のトップランナー的存在の酒井先生に、今回は難治性疾患として特定疾患の指定を受けている肺動脈性肺高血圧

筑波技術大学保健科学部
酒井 俊教授

症を中心とした内容で講演をいただきました。酒井先生の筑波大学附属病院で研修時代の原発性肺高血圧症(現在の肺動脈性肺高血圧症)の症例を担当した経験から始まって、循環調節における神経体液性因子の病態への関与をお示しいただきました。その中で、肺高血圧モデルおよび心不全モデルにおいてエンドセリン受容体遮断薬が肺高血圧を改善することを解明して、エンドセリンがどのような病態に関与しているかを明らかにし、今日、治療薬となった経緯などを含めて肺高血圧症の病態について解説いただきました。さらに、今後の治療薬の開発などの方向性などを非常に解りやすくお話をいただきました。

酒井先生の控えめなお人柄と穏やかな語り口調とは裏腹に、その卓越した研究能力や先見性などが知る人が見れば一瞬にして解る、循環器研究ではひときわ際立った内容でした。

50周年を迎える筑波大学の今日の発展も、筑波大発のオリジナルな研究こそが寄与してきたものであり、一見めざましい他所で出来上がった成果を抜いてきても、根付かずに消えてしまいます。酒井先生をはじめとした筑波大発オリジナルの研究から世界へ発信できる人材を輩出しつづけることこそが、今後、国際卓越大学を目指す筑波大には必要であると改めて認識させられる講演となりました。

筑波大学
University of Tsukuba

筑波大学附属病院 茨城県地域臨床教育センター

〒309-1793 茨城県笠間市鯉淵6528 ☎0296-77-1121
ホームページ <https://www.hosp.tsukuba.ac.jp/chiiki/cyubyo/>

茨城県